

批判と領解（上）

非難と批判

人間は他人のことを、あれこれと言う動物である。必ず、善とか悪とか、是とか非とか、好きだとか嫌いだとか、言わなくてはすまぬのが人間である。そして多くの人間は、そうする自分の心が正しいか、正しくないかは考えて見ない。

批判、それがなくては人間の生活はない。何を見ても、何を聞いても、誰を見ても、皆同じに見えたのでは、そこには生活はあり得ない。親鸞聖人も、観無量寿経は方便権化の教であり、大無量寿経は唯一絶対の眞実教であるとせられた。叡山の高僧をすてて、吉水の法然上人を仰がれた。そこには鋭い批判選択の眼が光っている。批判こそは、人間生活の成就する唯一の道であると言ってもいいと思う。

しかるにその批判の眼に、曇りが来て、個人の悪感情が加わると、批判は一転して非難となる。赤く血走った眼、白眼世をすねた愚痴の心、もの凄く光る貪欲の眼、熱く燃え上る愛欲の胸、そうした心を通して他人を見た時、正しいと言うも、正しくないとと言うも、善悪、好悪、等々の一切がまちがっている。しかし果してかゝるまちがいの一切を拭いつくして、正しい批判を成就することが出来るであろうか。批判と言いつても、まことに五十歩百歩の差であつて、それが三毒煩惱によつてなされる限り、一切がそらごとではあるまいか。

「よしあしの文字をもしらぬ人はみな まことのこころなりけるを

善悪の字しりがほに おほそらごとのかたちなり。

是非しらず 邪正もわかぬこの身なり、

小慈小悲もなければ、名利に人師をこのむなり。」（和讃）

批判の眼そのものを根本的に打ちのめした聖人の深い信境である。小慈小悲すらないことが、ものを正しく見分けることが出来ない根本原因である。慈悲を持たぬ凡夫としては「よしあしの文字をもしらぬ」ことこそ、「まことのこころ」でなくてはならない。

美醜、善悪、賢愚等に対して、一切無批判に暮すことは恐ろしいことである。聖人も決して、野獣のように本能のまゝに生きることを正しいと言われたのではない。白痴と、嬰兒と、動物には批判はない。

しかし誤まれる批判に生きることも恐ろしいことである。凡夫に三毒煩惱のある限り、正しい批判はあり得ないとすれば、一体どうすればいいのであろうか。

よく気をつけて聖人の御言葉を拝読すれば、

「よしあしの文字をもしらぬひとはみな、まことのこころなりけるを、

善悪の字しりがほに、おほそらごとのかたちなり。」

とのお言葉の中にも、鋭い批判の眼は光っている。即ち、善と悪とを分けて、さも善悪がわかつたかのように思っている心そのものの全体をそらごととすることは、何か別にもつと高い眞実が、眞実として生きている。即ちおほそらごとを、おほそらごと

として知る所には、そらごとならぬまことがある。そこに南無阿弥陀仏のみが真実である。

救われるとは、この眼、仏の眼によって凡夫の迷いを迷いと知らして頂く高い批判が生れて来る。

しかし考えなくてはならぬことは、高い批判の眼が恵まれるということとは、教えそのもの、南無阿弥陀仏そのものを批判することではない。真実の教えや如来を批判していることは、再び、おほそらごとの眼をみはっていることである。真実の教えや如来や、善知識に対しては、批判の余地がない所、即ちその虚仮の批判を打くだけで、超批判の世界、即ち無条件に帰依せしめたもう所に、如来や真実教の絶対的意義があるのである。

六字の大方の全否定によって打開される大信そのものが、善悪を分ける眼の虚偽を虚偽と知らしめるのである。親鸞聖人は、法然上人自体へも、大無量寿経へも、南無阿弥陀仏へも、無条件に帰依せられた。三宝に対する絶対帰依、超批判の世界にこそ信があつたのである。

自分のことは棚にあげておいて、他人のことは鋭く批判するのが凡夫の常である。